



健康のページ

きむら・えいじ 北海道生まれ。道の第3セクターや広告代理店などの勤務を経て、不登校や引きこもりの子どもを支えるインターネットサイトの運営会社を設立。2011年9月に遺品整理業者の健全化を目指し、一般社団法人「遺品整理士認定協会」を設立した。

THE YOMIURI SHIMBUN

# 読者新聞

2015年(平成27年)

5月28日 木曜日

夕刊

亡き人の遺品をどう扱うか、悩む遺族を手助けする「遺品整理士」が注目されている。全国規模で初の認定資格を作り、今春、著書「遺品整理士という仕事」(平凡社新書)を出版した一般社団法人・遺品整理士認定協会理事長の木村栄治さん(50)に話を聞いた。(野村昌玄)

# 遺族の心の区切り 手助け

## 遺品整理士



「遺族に寄り添い、切ない思いを整理する手助けをするのが遺品整理士の仕事」と話す木村さん

### 認定協会理事長に聞く

「資格を作ろうと思いつたのはいつですか。」

「北海道小樽市に住む父親(当時78歳)を亡くした5年前です。母親と2人暮らしでしたが、四十九日を終え、遺品の片づけを地元(の)の便利屋に依頼しました。3人がかりでテキパキと進めるのですが、『これは要りませんが、要りませんか?』といった機械的なやり取りに1時間余りで耐えられなくなったのです。」

「なぜですか。」

「要る、要らないと、単純に仕分けできないと思っただけです。私が贈った腕時計がありました。緑内障の父には文字盤が読めないのですが、地方公務員だっ

た生真面目さからでしょう。『外出する時の身だしなみをきちんとしてほしい』と言ったのです。父の娯楽だった音楽や落語のCDなども見つかりました。それぞれに思い出や思い入れがあり、涙があふれてきました。」

「遺品整理士には何が求められるのですか。」

「片づけだけではありません。アルバムが見つかる時がありますが、故人を知りたがるので、故人を知る上で遺品整理には極めて重要な情報源です。居合わせた遺族にも懐かしさがこみ上げ、手元に残そうと思

う物も出てきます。その時に処分するかどうか判断できなければ、落ち着く頃まで一時的に取り置くことも

あります。遺族に寄り添い、切ない思いを整理する手助けをする、ことだと思えます。」

「父の遺品整理を頼んだ便利屋は、技術的にはプロと言っても、遺族を思いやる気持ちが足りなかったのではないのでしょうか。」

「遺品整理士はどのよう認定されるのですか。」

「通信制の講座で、専用DVDとテキストで約2か月学習します。講師は、孤独死を研究する大学教授や、弁護士、宗教家などで、最後に廃棄物処理法など法令の知識や、孤独死した人の遺品整理への具体的な対応などの設問にリポートで回答してもらいます。」

「開講した最初の2か月の申込者は1000人足らず。インターネットに遺品整理士が流れると、その日だけで600人の申し込みがありました。運搬や葬儀、福祉関係の事業所など全国で1万1000人以上が受講し、認定されたのは7000人余り。遺品整理のニーズは高まっていて、受講者には、既に依頼を受けていた業者も少なくありません。」

「通常の仕事の流れは?」

「遺族の意向を踏まえて、廃棄する物、売却できる物がどれだけあるか調べ、必要な業者の手配もします。不法投棄や無断換金する不正も起きやすく、高い倫理観が求められます。料金目安は、ワンルームに作業員1人で7万円、4LDKに作業員6人で40万円前後です。」

「遺品整理はかつて、形見分けなどの形で遺族や、ご近所さんも関わっていたものです。故人と遠く離れて暮らすなど、今は様々な事情で遺族が一度も遺品整理に立ち会わず、全て任せられることも少なくありません。だからこそ、信頼できる整理士が必要だと思えます。」

(詳しくは医療介護サイト「ヨミドクター」に掲載)